

健康は自分でつくる大事な財産

あなたは本当にだいじょうぶ？

受けよう健康診査



今年も6月13日から健康診査がはじまります。今年も、2人の方の貴重な体験文を頂きました。「どうもないからだいじょうぶ」と思っているアナタにもう一度考えていただきたいのです。

もう一年早く検診を受けさせていたら...

大井区 山根玉枝さん

『おれほど丈夫な者はおらん、風邪ぐらいなら医者に行かんでも放ちちよいたら治るい』指を切ったぐらいなら小便をかけちよきやあ治る』といっていた主人。そのくせ胃がわるいと言って薬局で薬を買って飲んでいた主人。その主人をがんで亡くして五年になります。

主人の胃の具合が悪いことは、売薬を飲んでいたので分っていました。私が仕事を休んで病院へ行くように言うと、『おれが働かんでドネーするナー』

『仕事を休んだらドネーも成るまえがヤァ』といつて仕事に出掛けていました。お金よりも体の方が大切だからと、何度も言ったのですが医者には行こうとしませんでした。頑固でしたから、胃が痛いとも言いませんし、晩酌もタバコも止めませんでした。また、毎年市から通知のある胃の検査を受診するように言うと、『受けたら引っこかると』と言って受診しませんでした。

昭和五十六年の今頃でした。でしようか、市から検診の申込みの知らせが有りましたので、勝手に私の分と主人の分を申込みました。検診の当日は、嫌やがる主人をけんかごしで連れて行きました。検診の結果は、主人が予想していた通り、精密検査が必要でした。そして、精密検査の結果はすぐ入院することになり、医師から主人へは、胃かいようで入院が必要と伝えられました。私には、院長先生から『年が若くてお気の毒ですが、御主人はがんです。発見が遅れたため治ることは難しく、あと半年ぐらいの命』と言われました。

辛い看護が続きました、すこしでも延命効果があるならと、手術もしました。

胃かいようの手術と言ってありますので、同病の人が退院した日数になると自分も退院したがりますので、十二月に退院しました。

この時医師から、『今回は退院出来るが、二回目はダメでしようから悔いの無いように看病を』と言われました。退院した当初は、山へ風呂たきを取りに行ったり、家の

前の田へ出たりしていましたが、それも長くは続きませんでした。衰弱がひどくなり寝て居る時間がながくなると、『なして治らんそじやろうかいノウ』と言うので、年を取って大手術をしたから、と説明しました。

そして、五月下旬に二回目の入院をし、入院から十七日目に黄泉の国へ旅立ちました。享年五十一歳でした。

今、私が悔やまれてならなののは、もう一年早く検診を

私は健康を過信して失敗した

田原区 白石静雄さん

私は昭和六十年十一月二十三日、勤労感謝の日に脳内出血で倒れました。しかも山芋掘りに行って山で倒れたのです。

いつもは友達と一緒にですが生憎この日は一人でした。

午後二時頃でしたか、そのとき八〇センチぐらいの山芋を掘って、残り一〇センチで掘りあげるところでした。

長い間うつむいて穴の中に頭を突っ込むようにして掘っていたので、ひよつと頭を上げた途端、後ろへ引込まれる様な気がし、そのまま後ろへひっくり返りました。

体制を整えようとしたのだが、左手左足は石のように重たくて全然力が入りません。瞬間『やられた！中風になった』と分りました。

父親や叔父を中風で亡くしているの症状は知っていました。このままでは死んでしまふ、早く人の通る所まで出ていかなければ。幸い、三十九度の傾斜を五メートルほど登れば道路に出られる。自由な方の右手で草をつかんで、何時間もはいる努力をしました。

道路からはやぶで見えませんが、道路を

受けさせたら、喧嘩をしてでも連れていったら、胃薬を飲み始めたとき、悔やんでも悔やみきれません。葬儀が終わって、遺品の整理をしていると、日記帳が出てきました。この日記には『おれはがんだ 子供を頼む』とだけ書いてありました。日付は昭和五十六年九月二十四日となっており、これ以後の日記は白紙。この日は、精密検査の日でした。

子供が通ります、自転車も走ります。その度に、何度となく大声で『助けてくれ』と叫ぶのですが誰も気が付いてくれません。冬の夕暮れは早く五時頃から辺りは暗くなって来ます。下の方の家に電灯が点りテレビの音も聞こえます。しかし、登ることも下がることもできません、全全体が動きません。

そのうちに、五時頃から雨が降り始めました。体がどんどんと冷えてきます。しかし意識ははっきりしていました。朝でがけに友達にはこの場所を言って置いたから、きっと助けに来てくれると確信していました。ただ、一時でも早く来てくれ、と祈っていました。